

7. コロンビアの非日常 2 その1 バカンスとその時期について

元天理教コロンビア出張所長
清水 直太郎 Naotaro Shimizu

私の空手道場（コロンビア）の生徒に一人のパイロットがいる。ドイツのある航空会社勤務で、現在はパイロットの指導もしているベテランの50代の男性だ。彼は6月と12月もしくは1月にバカンスを必ず取る。長い時は1カ月も海外で過ごす。もちろん家族も一緒である。空手道は8年間も続け、黒帯を取り、現在は指導員として、道場生に稽古をつけている。しかし、お国柄というラテンアメリカの「家族ファースト」の風潮も手伝って、彼にとってバカンスは人生において欠かせない要素であって、従ってバカンスの間は、仕事や空手道場のことも一切関わり合いを持たない。これは指導員の彼のみならず、生徒も同じである。

私たち日本人は「休みだから」と、平気で仕事仲間や上司や部下に連絡を取るが、コロンビア（ラテン）世界ではそういうことは「緊急」の場合を除き、無い。聖と俗ではないけれども、仕事とバカンスはきっちりと一線を引いているのだ。

コロンビアでは、バカンスというと富裕層は海外に、またその他の社会階層の人たちはそれなりに「旅」をする。時期は日本でいう「盆と正月」に近いものがあるが、バカンスの期間は日本の比ではない。年の真ん中の6月～7月と年末年始の12月～1月に集中する。これは学校関係の休暇期間をベースに構築されているからだと考える。

そこで、私は友人や知人に次のようなインタビューを行った。質問は「あなたにとって旅（小旅行ではなく、長期の休暇における旅）とは人生においてどのような意義があるのですか」というものだ。抽象的も甚だしいのだが、心優しいコロンビアの人たちは答えてくださった（ランダムに回答者A、B…とする）。

・回答者A（30歳女性）：「私にとって旅は、人生において、労働活動・知的活動に対して肉体と精神を休める働きがあると思います。また、旅の時間は自分自身の時間に費やすことができる、もしくは自分の周囲にいる大事な人たちとの繋がりを強めるためのものです。一方では、旅先の文化や習慣などを自分たちの文化に照らし合わせながら、自分たちのモノ以上のことを学べる機会です。」

・回答者B（48歳女性）：「バカンスの旅というのは1年間働いたそのご褒美に値するお休みです。そして家族などの愛する人たちと共有するバカンスを過ごす、というのも大事なことです。」

・回答者C（21歳女性）：「私にとっては、（旅は）家族や愛する人たちが集まるためのものです。ほとんどの場合、バカンスの旅というのは家族やパートナーと行きます。コロンビアの人たちはバラバラには行動しません。また、旅は息抜きをするのに役にたち、それは日常のルーティン、仕事やその他の事から抜け出すことです。実際にはとても自由な感じですよ。」

また「人生の旅」、他国へ移住した方の捉え方は大変シビアである。

・回答者D（53歳女性）：「（今回の）私の旅行は人生をより良くするため、必然的なものだったのです。16年も勤めた会社から解雇されました。私は仕事の経験も学歴もありますが、52歳の身で仕事を失い、これからの人生をどうするか大変悩みました。スペインでの研究課程に応募していたので、査証の困難もありましたが、現在奨学金でスペインに滞在しています。帰国する

意図は、今のところありません。私の人生が旅そのものです。」
バカンスの旅と少しずれるが、興味ある回答もあった。

・回答者E（30歳女性）：「多くの人は旅というと長距離だとか長期間の滞在を指しますが、1、2時間の距離、例えば隣町に行く、また日常の学校への行き帰りのバス移動も旅なんです。旅という言葉は、知っている場所や知らない場所に行くこと。そして、色々なことを観察したり、学んだり、味わったりする個人の経験を積むこと。見たことに考えさせられたり、反省したりという、毎回旅というのは異なるのが常なのです。それは毎日違った人に出会ったり、異なる現象に出くわしたりすることと同じでしょう。毎日お決まりのコースであっても、興味があります。」

以前ペルーで、旅行ガイドの人と話す機会があった。彼はペルー生まれの日系人だ。主に日本からの旅行者をガイドしている。「日本人はとにかく盛りだくさんのスケジュールを組まないと文句を言うのです。少しでも空き時間やゆったりした予定であるともう間が持たない。次から次へとプログラムがないと満足しないのです。間があると何をしたいかわからないのです。だから4泊5日の旅行日程でもギッチリとプランを詰め込みます」と、日本人グループのガイドでの苦労話をしてくれた。一方、ラテンアメリカでは、旅は特に予定を決めていない、文字通りの休暇に重点をおく人の方が主流である。

ここにラテンアメリカ式のバカンス旅行と日本式の観光旅行の違いがある。ゆっくりと家族の絆や夫婦・パートナーとの時間を共有する、日常から脱出するというのが主な目的であるラテンアメリカ。とにかく、時間の許す限り、知らないモノ・場所・食を求めるジャパン。それでも、回答者Dのように、学ぶ、観察する、経験するという人も存在している。「日常」と「非日常」を区別しているのではなく、日常の中の非日常を求めているのかもしれない。国民性・地域性の社会的パターンがあることを改めて感じた次第だ。

さて、天理教における旅といえば、「おぢばがえり」という聖地参拝がある。宗教的な目的（聖地や奇跡地の訪問）は巡礼とよばれるが、スペイン語話者の理解を得るには、「帰る」を「巡礼する」と言い換えれば理解が早くなる。この対比の詳細は井上昭洋氏の「おぢばがえりの巡礼論」⁽²⁾を参考にさせていただき、「非日常」としてのおぢばがえりを捉えたい。

日本では、江戸時代にはお伊勢参りが旅の主流だったと聞く。「ご利益参り」という名目はあるにしろ、庶民は旅そのものを満喫するためであれば、関所を通ることや長距離を何日もかけて行き来することなど苦労ではなかったのに違いない。

天理教の「おぢばがえり」は信者にとっては「親」が住むところへの「里帰り」であり、それは自分の故郷、実家へ帰ることの喜び、楽しみなのであろう。コロナによる「封鎖」で著者自身が経験したが、海外からおぢばがえりは未だ「遠い」し「困難」もつきまとうぶん、おぢばに到着すると「感無量」なのだ。
[註]

(1) 「ぢば」とは人間創造の場所であり、天理教信仰の中心であり、人類の親里である。その場所（天理教教会本部の神殿中央）に参拝することを、ぢばに帰るといふ。

(2) 井上昭洋「おぢばがえりの巡礼論」、『グローカル天理』2011年12月号、参照。